

## 講座の概要（第1回）

- 1 大学連携講座の名称：vol.1 コミュニティ・オーガナイズングに学ぶ地域福祉
- 2 主担当大学及び所属：静岡県立大学
- 3 連携先大学及び所属：静岡大学
- 4 開催日時：1月22日（日） 13時00分 ～ 16時30分
- 5 開催場所：大手町会館 2階 大ホール（沼津市大手町3丁目5-16）
- 6 参加人数：21名
- 7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

### 【開催要旨】

本講座では、首都大学東京都市教養学部准教授でありながら、NPO 法人コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン副代表理事を務める室田信一氏を沼津市へお招きし、個人の困りごとを「みんなごと」して助け合いの暮らしづくりへのヒントをいただいた。

室田氏からは、アメリカ留学中にコミュニティ・オーガナイザーとして、コミュニティ・オーガナイズング\*（Community Organizing、以下CO）を行ってきた経験・それに基づく知識、さらには専門的に研究されている日本の「地域福祉」をとりまく現状についてもお話をいただいた。

その後、ワークショップ行い、参加者の身近な困りごとを「みんなごと」にして、連帯していくための具体的な行動などを考え合った。

\* COは、市民主導で様々なセクターの人々と関係を築きながら戦略あるアクションを起こし、自分たちのコミュニティを根本からよくすることを目指す方法であり、考え方です。

### 【講師概要】

首都大学東京都市教養学部准教授。同志社大学社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了。博士(社会福祉学)。アメリカ留学中にコミュニティ・オーガナイザーとして活動することに目覚め、以降、地域を基盤とした活動の今日的な意味やその推進方法、専門家の養成などに関心を抱きながら、実践・研究をしている。共著に『参加と連帯のセーフティネット——人間らしい品格のある社会への提言』（ミネルヴァ書房、2010）、『地域福祉』（ミネルヴァ書房、2009）など。

### 【成 果】

東部地区で地域に関わっている参加者（実践者）にとって、室田氏の講演にあったCOの考え方に基づくリーダーシップの考え方や、組織やコミュニティが成長しながら成果を出していく際のポイントは貴重な学びになったと反響をいただいた。また、東部で活動する方々をこれまでになくプラットフォームでつなげる機会となった。

## 講座の概要（第2回）

- 1 大学連携講座の名称：vol.2「隙間」から考える 地域のレジリエンス
- 2 主担当大学及び所属：静岡県立大学
- 3 連携先大学及び所属：静岡大学
- 4 開催日時：1月29日（日） 13時00分 ～ 16時30分
- 5 開催場所：静岡県総合社会福祉会館2階(静岡市駿府町1-70)  
静岡県ボランティア協会ボランティアビューロー
- 6 参加人数：15名
- 7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

### 【開催要旨】

本講座では、京都大学学際融合教育研究推進センターグローバル生存学大学院連携ユニット特定准教授の清水美香氏を講師に迎え、現代リスク社会を乗り越えていくための様々な示唆を与えてくれるレジリエンスの本質を学んだ。

清水氏からは、「レジリエンス」について、その多面性や複雑さも含めて丁寧に解説いただいた。講演後のワークショップでは、参加者のみなさんから「身近に感じている隙間」を挙げていただき、それをどうデザインするかということ、レジリエンスの視点をもとに考え合った。

また、2015年のネパール大地震をきっかけに地元ネパールでの防災コミュニティセンターの設立に関わったナレス・マハラジャン氏（静岡県立大学出身、焼津市在住）に地域のレジリエンスを育む様々なプロセスをご紹介いただいた。

### 【講師概要】

京都大学学際融合教育研究推進センターグローバル生存学大学院連携ユニット特定准教授。アメリカン大学国際政策修士号、大阪大学国際公共政策博士号取得。学生時代から米国を拠点にグローバルリスク、ガバナンス研究に携わってきた。

「木を見て森も見る」（俯瞰的）研究を通して、変容する現代リスク社会の問題解決のための仕組み創りに取り組む。在米日本大使館、野村総合研究所アメリカ、米国 East-West Center にて研究職を歴任。著書『協働知創造のレジリエンスー 隙間をデザインー』（京都大学出版会、2015）。

### 【成 果】

参加者が身近に感じている隙間やナレス氏の発表が良い事例となり、多様な意味を持つ「レジリエンス」を立体的に捉えることができた。また、参加者同士が静岡のコミュニティ・レジリエンスを考え、実践していく際の仲間となることができるきっかけの場となった。

第5回静岡2.0フォーラム(全2回) — 今、私たちができる「地域」づくり —  
vol.1 コミュニティ・オーガナイズingに学ぶ地域福祉  
報告書(内容詳細)

報告者：大基(静岡大学)

### 実施概要

開催日時：平成29年1月22日(日) 13時00分～16時30分

開催場所：大手町会館 2階 大ホール(沼津市大手町3丁目5-16)

### プログラム

オリエンテーション(静岡2.0の団体紹介・活動紹介含)

基調講演 室田様

PKT(べちゃくちやタイム)→質問出し

場面転換・休憩

質疑応答(質問付箋を講師に選んで話していただいた)

ワークショップ(4～5名のグループワーク)

全体発表

クロージング(室田さんからコメント、2.0から一言&事務連絡)

### 講演内容 / 講師：室田信一氏

コミュニティ・オーガナイズing(Community Organizing、以下CO)は、普通の市民が主導で様々なセクターの人々と関係を築きながら、戦略をもってアクションを起こし、自分たちのコミュニティを根本からよくすることを目指す方法であり、考え方である。

室田信一氏の自己紹介の後、室田氏がCOに興味を持つきっかけとなった出来事やその時の気持ちをお話してくださった。小中学生時代に自分と友達を「できる」「できない」で線引きされるようになったことが気持ち悪く、学校や先生に対する不信感が芽生えた。その線引きの中にしかないことに、否定された自己を感じた。

そして自分が自分らしく生きられる場所を求めてアメリカ留学へ行った。アメリカは個人を尊重するがゆえに互いが無関心だと感じた。人と繋がることで自分に役割があり、人に期待されていることが喜びと感じたのだ。

またアメリカでの留学中に、日本を離れることで日本に古くからある「地縁組織」の力に気付いた。日本は法律で社会福祉を推進している数少ない国であり、地域福祉法にも地域福祉の推進が明記されている。しかし、現在は1%未満の人が地域福祉を支えおり、これは政府も限界を危惧しており、これからの地域福祉は一人ひとりが当事者という感覚を持つことが求められている。2割の人がアクティブになる必要があると考えられている。そのためには、制度に人を当てはめるのではなく人に制度を当てはめなければならない。

次にCOについての考え方についてお話しがあった。これまで課題に対しては「担い手」が必要だと考えられてきた。COでは担い手は必要なく、お互いが同じ価値観を抱き関心と資源を交換する(=共有する)ことが大切である。そのためには課題に対して当事者意識を持つことが重要である。課題に対する価値観をそれぞれの関心と共有することで、共通の関心が生まれ、関心とリソースの交換がされる

また、一人が強烈的リーダーシップを発揮して原動力にも舵にもなる「ドット・リーダーシップ」ではなく、同じ価値観を共有して一緒に取り組む「スノーフレイク・リーダーシップ」が必要である。つまりリーダー像は、かつての博識・管理・地位のリーダーから、学ぶ・適応する・実践するリーダーが適当になる。

## ワークショップ / 静岡 2.0

ワークショップでは、4～5名のグループで自己紹介や講演で印象に残ったことのシェアを行いウォーミングアップした後、「わたしの身近な困りごと」を参加者に出していただいた。そして、1グループで1つの困りごとを取り上げて「その困りごとをどのようにみんなごとにするか」について話し合いながらアイデアを出していただいた。

単に困りごとの解決案を出すのではなく、他にも同じ課題を抱えているかもしれない人たちを仲間にしなが（「みんなごと」にしなが）解決策を考えるという点で、前半の室田先生の講演内容を応用していただいた。

ワークショップの中では、「子どもを遅くまで預けられる学童保育機関がない」という困りごとに対して、まずは同じような悩みを持つお母さん同士が仲間になることが重要であるという考えが出たり、「地域の山が荒れている」という困りごとに対しては、イベントをきっかけに山の現状を多くの人に知ってもらうというアイデアなどが話し合われた。

## 参加者の声

- ・ いろんな所をつなげて考えられる良い機会でした。自分の話を聞いてくれる人と出会えてよかったです。（20代女性）
- ・ このような集まりを何度も行う。話していない困りごとを話せる場・人を作っていきたい。（50代男性）
- ・ COという考え方・方法を初めて知りました。モヤモヤと自分の中にあった概念に名前をもらった感じで、少しスッキリしました。楽しかったです。もっと時間があつたらもっと学びたかったです。（40代女性）

## 今後の展望 / 静岡 2.0 代表 青野

今回のフォーラムでは東部地域で地域活動をされている方々を中心に新たな関係性をつくりだすことができた。また、COの考え方を静岡の方々と共有することができた。静岡 2.0 が目指すレジリエントなコミュニティには、COのような考え方を持っていて動く人や、開かれる場や機会が必ず必要になってくる。「小さな困りごと」を共有して地域の中での力で解決できるような地域にしていくために、COの考え方を応用した機会の創出、人材育成に努めていきたい。

また、今回関係性のできた参加者同士が再び集まり、さらに他の方も参加できるような、学びの場を今後も開催していく。



▲室田氏の講演の様子



▲ワークショップ後、全体への発表の様子

第5回静岡2.0フォーラム（全2回）ー 今、私たちができる「地域」づくり ー  
vol.2 「隙間」から考える地域のレジリエンス  
報告書（内容詳細）

報告者：大基（静岡大学）

### 実施概要

開催日時：1月29日（日） 13時00分 ～ 16時30分

開催場所：静岡県総合社会福祉会館2階（静岡市駿府町1-70）

静岡県ボランティア協会ボランティアビューロー

### プログラム

オリエンテーション

基調講演 清水美香氏

PKT（ぺちやくちゃタイム）→質問出し

質疑応答（質問付箋一つひとつに丁寧にお願いいただいた）

ワークショップ（4～5名のグループワーク）

ネパール防災センター完成報告

ハーベストタイム（各発表に対して清水氏からのコメントを中心に全体での学びを共有する）

クロージング

交流会

### 講演内容 / 講師：清水美香氏

内容社会システムのレジリエンスとは、現代リスク社会を乗り越えていくための様々な示唆を与えてくれるものである。

レジリエンスは一言で表すのは難しい。変化するまでのプロセスとして、気づき→つながり→木も見て森も見る→学ぶ→変化と階段状になっている。スタートラインである「気づき」が大切である。木も見て森も見ることは隙間を見出し、デザインするための入り口になる。木と木はそれぞれ独立して機能する必要があると同時に、木と木の間・関係性を見ることが欠かせないからである。ただくっついたり離れていたりしていればよいというわけではない。自分の周囲に立っているものとの関係を見出すこと、つまりすき間を見つけることがポイントである。

人、家族、コミュニティ、地域、社会のレジリエントな関係性は、一人ひとりの心の持ちようでも他者と繋がることで築いていくことができる。実際にニューヨークの貧しいところに行き、つながりが少ないので復興に時間がかかったことを実感した。私たちが未来をどう見るかで変わってくる。

つながりは点から線であるべきだ。個々で見るのではなく、それぞれの点をつなぐ取り組みや、仕組みを創るアプローチにするのである。過去→現在→未来をつなぎ、世代をつなぎ、人からコミュニティ、コミュニティから未来の社会へとつなぐことが必要である。復興の場合では、何か起こってから対策するのではなく、対策をしながら復興することが求められている。

ポイントは人が隙間をどう見出すかということである。隙間からレジリエンスをデザインするという考え方を持って視点を変えてみると隙間を見つけられる。

また、社会の隙間を見出すヒントとして、自然から学ぶことがたくさんあるのではないだろうか。

## ワークショップ（第1部：静岡のレジリエンスを高めるために）／静岡 2.0

ワークショップは、最大4人のグループで行った。まず、自己紹介の中で、昨日の夕食や自分がイメージする「隙間」などについて話し、和やかな雰囲気ワークショップに入った。

その後、レジリエンスと隙間の概念を整理し共有するために「清水さんの講演での発見、気づき、共感」をグループごとに話していただき、より理解が深まったところで、一人ずつ「私が静岡（地域・地元）で感じている「隙間」」を書き出していただいた。

次に、全員で輪になり、それぞれが書いた「私が感じている「隙間」」を発表し、関心が似ている人同士で集まり、新たなグループでワークショップを再開した。

新たなグループは、①「地元の人と外から来た人の隙間」②「若者と地域の隙間」③「非常時の連携」④「静岡の良さをどう伝える？広げる？」の4グループがつけられた。

それぞれのグループで、「静岡（地域・地元）のレジリエンスを高めるために、どのようにその隙間をデザインしたいですか？」という問いを中心に、各グループで身近に感じている「隙間」を入り口に、「レジリエンス」を深く見つめ考えた。

例えば、①「地元の人と外から来た人の隙間」のグループでは実体験を元に、外から来た人も地域の役割を引き受けるとことや、地域の内の人と外の人が交流する機会をつくるという具体例が出た。また、③「非常時の連携」を考えるグループでは、自治会や子供会への加入が減っている事に対して、加入のメリットをわかりやすく説明したいとか、静岡在住の外国人が非常時には言葉の壁や宗教・文化の壁に晒されて孤立するという懸念に対して、違いを知る場としてのイベントやお祭りなどをしたいという具体的なアイデアが挙がった。

## 特別事例提供 /ネパール大地震復興支援報告（ナレス・マハラジャン）

2015年に起きたネパールの大地震後、地元のために何かしたいと活動し始めた、静岡県立大学出身、焼津市在住のナレス・マハラジャンさんに、地元ネパールで初めてとなるコミュニティ防災センターの建設の経緯をご報告いただいた。地元住人の出資と海外（主に静岡）の寄付を利用して建設されたセンターの設立経緯や、今後センターが地域で担う文化の継承やコミュニティ・スペースとしての役割、防災教育の拠点という機能は、まさにレジリエンスを高めるものであった。

この報告により「レジリエンス」の概念がより鮮明になり、清水氏がキーワードに掲げた「木を見て森も見る」という考え方もより具体的に捉えることができた。

## ワークショップ（第2部：ハーベストタイム）／清水美香氏 × 静岡 2.0

最後は、フォーラム vol.2 全体を通しての学びを収穫してシェアするようなイメージで、ハーベストタイムという時間を設けさせていただいた。具体的には、ワークショップ第1部で考えた4つの「隙間」について、どのようなことを考えたか各グループから発表をしていただき、それに対して清水氏からコメントをいただいた。

それぞれのグループが身近な事象について考えた結果、より具体的な着目点が生まれ、清水氏からも「レジリエンスは"もたれ合い"ではなく、それぞれの個人や組織が自立したシステムであることが前提。それらが力を発揮しあい、補い合うことがレジリエンスである。」という繊細な示唆や、「隙間なくぴったりとくっついているのが良いというわけではない。向き合ったら傷つけ合うこともある。違いをわかりながら、何ができるかを考えることこそがレジリエンス。」という根源的な解説をいただくに至った。

## 参加者の声

- ・とても役に立つ考え方、WSができて感謝しております。今後の地域での活動に学んだことを活かしていければと思います（30代男性）
- ・大学が連携することで若者もこういった講座に参加する機会を得られるのでよいと思います。（年代・性別未記入）

## 今後の展望 / 静岡 2.0 代表 青野

今回のフォーラムでは、防災、地域の活性化、個人のレジリエンスなど、様々な分野に関心のある方にご参加いただいた。「地域のレジリエンス」という、どんな人も当事者になり得るテーマについて、様々な方が混ざり合って、まさに当事者として共に学び合うことができたことは貴重な機会となった。

また、近年様々な意味で用いられる「レジリエンス」の概念について、その複雑な部分も含めて、講師から丁寧にご教示いただけたことは非常に貴重な機会となった。

講師からも参加者からも、「深い内容だけにもっとじっくり考えたい」という声をいただいたため、再び清水氏の講演とワークショップを企画するなどしていきたい。また、静岡のレジリエンスを高めるために、共に学び、実践していく仲間を増やしていきたいと考えている。



▲清水氏の講演後、質疑応答の様子



▲ワークショップの様子



▲ナレス・マハラジャン氏の事例発表



▲ハーベストタイムの様子